

斎藤平吉先生の御逝去を悼む

神戸博太郎

元早稲田大学理工学部教授斎藤平吉先生は、昭和58年10月26日、心筋梗塞のため急逝された。行年91才であった。因に、先生の御長男は前本会庶務幹事斎藤安俊東京工業大学教授である。

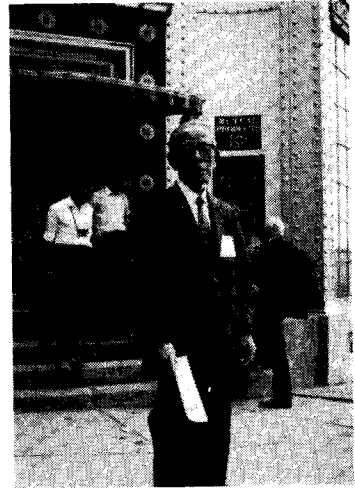
私が始めて斎藤先生にお目にかかったのは、1968年8月、米国マサチューセッツ州ウースターで開かれた第2回国際熱分析会議の折であった。その後本会の10周年記念会の折に御講演をうかがったことと、1977年京都で開かれた第5回国際熱分析会議の前に、募金にお力添えを願うため、早稲田大学理工学部の大塚良平教授の部屋でお会いしたのと、都合3回しか直接お声を聞く機会はなかった。しかし毎年年賀状を頂いたし、安俊さんや大塚教授を通して何となく身近におられるような気がしていたので、新聞紙上に御逝去の報を見たときには、本当にびっくりして、翌日の御葬儀に駆けつけた次第であった。

斎藤先生は大正6年京都大学化学科を卒業され、直ちに現在の日本鋳業に入社され、非鉄金属の選鉱・製錬の権威として、わが国鋳業界の重鎮であったが、同時に熱重量測定(TG)の先駆者として、世界的に評価の高い学者であった。

熱重量測定に用いられる熱天秤は、1915年東北大学の木多光太郎教授によって創案されたものであるが、斎藤先生はこの装置を上皿式に直し、任意の雰囲気中で測定できるように改良して、硫化鋳をはじめ種々の物質の高温における反応を研究された。これはまさに今日の熱重量測定そのものであるが、先生はこれを熱天秤分析(Thermobalance Analysis)と呼んでおられた。

先生は1953年早稲田大学理工学部教授に就任され、理工学研究所長を勤められた。この間資源工学科において多くの俊秀を育成されたが、同時に熱天秤によるTG研究の発展に留意され、1962年「熱天秤分析」の著書を刊行された。そしてこれらの研究の総括として、第2回国際会議の折に“過去50年に亙る日本における熱天秤および熱天秤分析”と題する講演をされた。この会議に出席していた、ルシヤトリエの流れを汲み“無機熱重量測定”の大著を刊行したパリ大学のクレマン(パパ)デュバル博士も、木多先生に始まる日本におけるTG研究に深く感銘を受けたと述懐していた。

このように1968年の第2回国際会議において、斎藤先生は生涯研究の一つの締めくくりを示されたわけであるが、同じとき私は私の熱分析研究の国際社会へのデビューをしたのであり、私にとってもまことに印象の深い



1968年ウースターにおける第2回国際熱分析会議の折に撮影

会議であった。この会議の席上、国際熱分析連合(ICTA)が結成され、私は須藤俊男、関集三両先生の御推挙があって、日本代表のcouncilとして国際組織の役員となった。その後3年毎の国際会議の折に順次副会長、会長、前会長と役員を勤め、そして1980年西独のバイロイトで開かれた第6回国際会議の折に日本代表のcouncilの役目を斎藤安俊教授に引きついで、私の役目は終わった。斎藤平吉先生は亡くなった私の父と同年輩であり、私は父に対するのと同じような気持ちで接していた。私がICTAの役員の仕事をお父の安俊さんに譲ることになったものなにかめぐり合せかも知れない。

斎藤先生はTGは“連続記録による連続観察”を特徴とするとされた。現在のような自動調節・自動記録でなかった当時のTGは、まさに超人的な努力を要する測定であったに違いない。先生はこの測定によって培われた精神力を“Thermobalance spirit”と呼ばれ、研究のみならず鋳山の経営管理業務などにも生かされてきたという。

先生の御葬儀は、早稲田大学の理工学研究所の門前の寺院で挙行された。先生の生前からの御希望により、戒名は

熱秤院連研日鋳居士

とされた。生涯を“Thermobalance spirit”で貫かれた先生の面目躍如たるものがある。

幸に、先生の御遺志は令息安俊教授を始め、早稲田大学の人々によっても受けつがれていくことと思う。わが国の熱分析の歴史に大きな金字塔を建てられた斎藤平吉先生の霊に対し、安らかに眠られることを祈って止まない。

(昭和58年12月13日記)